児童文学作品紹介フリーペーパー

紙版 ハコブネ×ブックス vol.55

https://hakobune.wp-x.jp

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・ＹＡ作品を未来に語り継ぐ web サイトです。

特集 家出じゃないの

青少年の家出は条例に違反する行為です。それを大人が支援したり、見過ごすことも許されません。児童文学が家出を肯定的に描くことはコンプライアンス的にNGな案件です。それでもかつて家出物語で子どもたちの成長を促したスピリットは今も健在です。現代の家出物語の主人公たちは、微妙なバランスの中、これは家出じゃないのと言い訳しながら特別な時間を体験していきます。『ぼくがぼくであること』で家出少年はなぜ通報されなかったのか。大人が時代の正しさを疑い、見極めるべきだと、家出物語の名作は示唆します。変化していく物語を結んだ時、コンプライアンスよりも大切なことが見えてくるはずです。

ぼくがぼくであること
山中恒
実業之日本社 1969 年

ミクロ家出の夜に

作　者　金治直美
出版社　国土社
発　行　2010 年 4 月
ISBN　978-4337187528

review

中学一年生の女子、美陽（みはる）は、電車を一駅乗るだけの塾からの帰路、山手線を逆回りに一周することで、帰宅を一時間遅らせるミクロ家出を試みていました。母親の縁故で格安な塾で教えてもらえるようになったものの、そうでもなければ塾に通う余裕などないのが美陽の家の経済的状況です。生活は豊かではなく、遠出して遊びに行くこともできず、父親はいつもイライラしています。ストレスばかりの美陽はミクロ家出でささやかな抵抗をしたかったのです。そんなある日、電車に忘れ物をしそうになったところを注意してくれる不思議な声が頭の中に響きます。姿が見えないその声は別の日にも大阪弁で美陽に話しかけてきます。それが都市伝説的存在である、網棚ばばあとの出会いであり、いつも不機嫌な父親が心に秘めていた悲しみを知るきっかけとなるのです。

いつまでもここでキミを待つ

作　者　ひろのみずえ
出版社　ポプラ社
発　行　2010 年 1 月
ISBN　978-4591114803

review

美術スクールからの帰り道、中学三年生の女子、奏（そう）は、横浜駅から家へと向かう東海道線ではなく、誤って寝台特急サンライズ出雲号に乗っていました。受験のプレッシャーに苛まれ、自分の才能に自信をなくしてばかりの毎日にくたびれていたからなのか、慌てふためきながら、奏は、これは家出ではないと自分に言い聞かせます。それでも、心配しているだろう両親に電話できないでいたのは、閉塞感からの解放を求める気持ちでした。奏は同じ電車に乗っていたカズマというひとつ歳下の少年と知りあいます。尖った格好と鋭い言葉遣い。真面目な奏と、不良のカズマは反発しあいながらも惹かれあっていきます。宮島や尾道を一緒に巡りながら、互いが抱える苦しみや哀しみを知り、少しずつ気持ちを近づけていく二人。もっとこの旅を続けたいと奏の心は疼きます。

不完全宣言

作　者　林けんじろう
出版社　PHP 研究所
発　行　2025 年 7 月
ISBN　978-4569882246

review

山形県に暮らす小学六年生の女子、香保（かほ）は、ゴールデンウィークに父親と鎌倉に住む叔母の家を訪ねて、誕生祝いをすることが恒例の行事になっていました。今年、鎌倉を訪れた香保は、父と叔母の会話から両親が離婚した理由を悟ってしまいます。ドジで不甲斐ない父親と、その資質を受け継いだ自分は、母親に見限られたのだと思い込み、父親のことが疎ましくなった香保は、ちょっとした反抗を試みます。鎌倉にいる親友の椎菜（しいな）が、大切にしていたマスコットのぬいぐるみを失くして落ち込んでいることを聞き、紛失場所の東京を二人で訪れ、探すことにした香保。これは家出ではないのかという疑念を、そんな口実で打ち消す一日だけのショートトリップが始まります。みっともなく不完全でも愛されることを、香保はこの小さな旅から感じとっていきます。

夏のピルグリム

作　者　高山環
出版社　ポプラ社
発　行　2024 年 7 月
ISBN　978-4591182239

review

中学一年生の女子、夏子（なつこ）は、妹の千佳が亡くなってから心を塞ぎ、将来への希望や夢を持てなくなっていました。それでも同じクラスになったマチとアイドルグループ「すたーばれっと」の話題で仲良くなります。「すたーばれっと」を好きだったのは妹の千佳でした。千佳が推していたメンバーの羽猫くんの突然の活動休止の発表にショックを受けた夏子は、妹の想いを届けるため活動休止中の彼が目撃された宮崎に行きたいと想いを募らせます。マチと一緒に搬送用トラックの荷台に隠れて九州に向かった夏子は、多くの人たちと出会い、助けられ、交流しながら、その人たちが抱く夢を聞き、自分と向き合います。羽猫くんを追いながら、これは家出ではなく聖地巡礼の旅なのだと夏子は考えます。巡礼者（ピルグリム）になった夏子は、この旅で自分の胸に閉じ込めていたものを解放していきます。

みんなの家出
（藤田のぼる）
福音館書店 2013 年

小学四年生の芙美（フミ）が読んだ『どっちが家出？』という本は、二人の女の子の家出の物語ながら、両方とも家出とは言えない展開でした。芙美は、作者に手紙を書き、その真意について質問しますが、作者も答えを決めかねていました。家出とは何か。物語が見せてくれる答えはこちらから。

特集
家出じゃないの

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.55
2026 年 4 月 1 日発行　●発行人 きむらともお

事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト ハコブネ×ブックス（非営利）を運営しています。日本児童文学者協会第 6 回児童文学評論新人賞佳作他,諸々を受賞。

お問合せはこちらから。